

## 青山仁（令和四年一月号）

変わらずに地上ホームを出て行きぬひたち3号仙台行きは  
廃業の店並びたる国道沿いすき家一つが営業しており  
特急は記憶を辿るように行く 大熊・双葉・浪江・原町  
駅構内・駅前・駅に向かう道 それのみ人に許したる町  
駅周辺だけが許されたる町のプラットホームに人影はなし  
何者もいないところか何者も消えたとるところか大野駅前  
列車ごと波に吞まれし記憶など忘れて新地駅は新し  
新しきレール・踏切・架線柱 建てる筈なきところに建てり

### ●作者の言葉

●作者の言葉  
今年の十月、東北に旅行  
した際、復旧した常磐線を通  
るルートを選んだ。「乗り鉄」  
を自認する以上、これはある

意味使命のようなものと思っ  
ていた。

いわき駅を過ぎてからの光  
景は衝撃的なものであり、自  
然と「詠まなければならな

い」という思いが湧き上がり、夢中でスマ  
ホに打ち込んだ。それがこの八首である。  
この度、震災詠の第一人者である本田一  
弘先生に年間選者賞に選んで頂いたことは  
望外の喜びです。今後も鉄道、を通して  
見える社会等を詠んでいこうと思います。

### ●選者の言葉

令和四年一月号「短歌の現在」No.489で佐  
佐木幸綱は「今月のこの作者の八首は、福  
島原発事故と津波で壊滅状態になった常磐  
線の各駅に取材した問題作。」と評している。  
まさに同感である。二〇一一年三月十一日  
に起きた東日本大震災並びに原発事故から  
十一年が経過し、記憶が薄れてきている中、  
鉄道好きの青山さんならではの現場での取  
材に基づいて震災を詠んだ八首が忘れられ  
ない。特に七首目の結句「新地駅は新し」  
という逆説的で皮肉な表現が今も胸に突  
き刺さっている。毎月、七人の選者にはラ  
ンダムに歌稿が割り振られるのだが、青山  
さんの作品が偶然私の所に送られて来て  
最初に出会って読むことができ、こうし  
て選者賞に推せたことを大変嬉しく思う。

